
現想

学無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現想

【Nコード】

N5810N

【作者名】

学無

【あらすじ】

誰にも言えない思いはある。俺の場合は、それが身近にありすぎて……。気が付いてみれば簡単なことだったんだ。一言、口に出せばいい。

同じ時間を繰り返してるんじゃないか。

そう直感したのは三日前の日のことだ。

朝7時に目が覚めて、鞆に今日の用意を詰めて、朝飯は卵焼きとお吸い物と焼き魚、テレビのニュースを見てたら時間が来て慌てて家を飛び出した。

そんなどこにでもあるような一日の始まり。

けど俺の頭のどこかに、それは予定として埋まっていた。

その感覚は一般に、デジャビュなんて言われている。

「よ、はよっ」

だから俺が特に気にも留めず、見かけた学友たちに片っ端から挨拶していった。

「——ということから、この時、視点であるケンミナツの普段の行為が、何となく自分に向いていると言うことに気付き始めるのですが、自分にはすでにあこがれている先輩がおり、その憧れと、ミナツに抱く感情との差を——」

芥子色の上着を着た担任が、喉をつぶしたような声で授業を進めていた。

俺は早くも舟こぎ。教師の声を子守唄として、うつらうつらとしていた。

季節は春の終わりが。まだすずめの鳴き声が桜色の上に響いているが、徐々に上がり始める気温にしたがってそれもセミの鳴き声に変わっていくのだろうか。

そうだったら、うざいな……。まあ、でも窓から流れてくる空気はまだ心地よかった。

「洋介っ」

ぼんやりしていると、とんとんと、肩とつつかれた。

「なんだよ……」

ぼやけた声を上げながら、後ろの席を振り返った。しかし、後ろに座っていたやつは片手を口の横につけ、教科書を前に向けてふつた。

「いや、……こっちじゃなくて前っ、前見ろって!」

潜めた声に促されて、なんだよと繰り返しながら前を向く。

振り返った先では、さっきまで主人公の真情を語っていた教師が俺をにこやかに見つめていた。

いつの間にか教師の声は止まっていて、教室のあちこちからも白けた視線が集まる。

「……………」

なんか、やばげ……。こんな時どうすればいいんだっけ。

1、とりあえずへらへら笑ってみる

2、慌てて立ち上がって謝る

3、……………思いつかん

「洋介」

冷水のような唖れ声が俺を呼んだ。

「んで、ちょっと話を聞いてなかっただけで、集めたプリントを持っていかなきゃいけないんだよ……」

俺は教室に戻ってくるなりぐちぐちと不満を漏らした。

「しかも、あの後世界史の教師に捕まって資料室に手伝いに行かされるし、俺は小間使いじゃねえっつのっ!」

結局流されるまま、資料室の整理と必要な用品の持ち出しを手伝わされて、俺はへとへとだった。

「はっは、そりゃお前がついてないだけ」

「つうか、小宮が何度も呼んでんのに、ぼっと空見つめてうつとりしてたお前の自業自得だよ」

いえてるいえてると、俺の机に集まっていた男子どもはけけら笑った。

「お疲れ様、よう君」

うざったい笑い声を手で払っていると、小春のように温和な声が混ざってきた。

馴染みの声に振り返ってみたら、そこにはよく知った幼馴染の顔があった。名前は琴未。茶色がかったショートヘアに、目も鼻も丸っこく、輪郭まで丸みを帯びてるせいで、一瞬小学生が紛れ込んだのかと思った。

「あ、よう君また失礼なこと考えてない？」

そして顔に似合わず、鋭いところがある。

「思ってない思ってない」

もはや反射的に頭を振ったが、琴未は丸い目を必死に横に伸ばして俺を見つめていた。頬まで赤めやがって、はたから見たら泣いてるようにしか見えないっつの。

泣いてるのか怒ってるのか曖昧な幼馴染に、どうしていいのものと寝癖の残る髪をかき乱す。

はあ、ったく調子が狂う。

教師に向けていた毒っけもどこの空。俺は頬杖して顔をそらしながらつぶやいた。

「童顔で幼児体型で、おまけにしぐさまで子供っぽくて——いつつうう！！」

いきなり頭に鈍痛が走ったと思えば、数人の男子が握りこぶしを持ち上げ、相手を射殺さんとする目で囲んでいた。

「ちよ、おまえら、少しは容赦しろよ！　いてえだろうがっ」

俺が睨むと、その中の一人が一步前にでる。短い髪を剣山のようににした、活発そうなやつだ。

「これは幸せを——」

「分かってないやつに分からせるための正義の鉄槌だ」

待ての態勢で、えらそうにするそいつの言葉を横から奪う。それから溜め息を交えて続けた。

「だからそれ、意味わかんねえんだっつ——っと。人の話は再度ま

で聞けっ！」

途中振り下ろされたものをよけて、再度相手を白い目で見る。…
…まあ、言いたいことは終わってたんだが。

「チっ……やりそこねたか」

「公然とやるなっつの………」

「澤田、諦めるなっ。そして忘れるな！俺たちの祈願は——」

「もーつつこまなくていいかー？ いいよな」

どこか遠く離れていくクラスメイトたちを呆れた目で見送って、
頭を切り替える。

枝葉を揺らすような、やわらかくてささやかな笑い声が聞こえた
のは、その瞬間だった。

「いいな、よう君は。毎日が楽しそうで」

男どもが勝手にボルテージをあげていく中、琴末の声ははっきり
と俺の耳に届いた。

それをつむぐのは、少し時間を経たような琴末の微笑み。

「どうみたら、楽しそうに見えるんだ」

俺の口を割った嫌味にも琴末はくすくすとやわらかく笑うばかり
だった。

うつすらと瞳を開き、少しとがった唇の端がわずかに皺を深くす
る。細い毛先がゆらゆら揺れて、木漏れ日が髪をより茶色に近づけ
ていた。退屈な教室も、暑苦しい男どもも、こいつにかかければ、
春の木陰のようにほんのり桜色に染まっていく。

「あーもーううう。てめえらいいかげんうるせえ！！ 暑苦しいか
らさっさと散れっ！！」

琴末に見とれてしまった自分が恥ずかしくなって、とにかく大声
を上げて顔のほてりを誤魔化した。

「逆上かよ、余裕ねえな」

「ははは、どうせ幼馴染にぼってきたんだろっ？」

「うっわケダモノ。琴美ちゃんのことイラらしい目で見てんじゃね
えか、ひひひ」

「るせえ、んなんじゃねえよ」

水を得た魚みたく目を好奇色に光らせる連中を、乱暴に腕で払いのける。

「俺はさっき寝れなかった分をここで解消すんだよ。てめえら邪魔すんな」

言うより先に、俺は机の上で腕を組み突っ伏した。

暗くなった視界に、またデジャビュが頭の中に浮かび上がる。

夕焼けに染まる草原、鞆を持った俺と琴末が縦に並んで歩いている。ふと琴末が振り返る。

眉を下げ、夕焼けに滲んでしまったかのように俯いて、濡れた声が聞こえた気がした。

そして、背後と振り返った琴末が——少しはなれたところにいた。——は？ 腕と髪の間、机二つ分はなれた所に立つ琴末が同じ顔を……

しかし、それを確かめるより先に、琴末が俺の視線に気付いて子供っぽい笑みを作った。

「気の……せい、か……？」

のしかかってきた男たちと跳ね除けて、俺は朝と同じように考えた。

次の時間は自習で、誰にもとがめることなく、邪魔してくる悪鬼どもを押しつけて眠た。

両腕に頭がのしかかり、その重量感と相反して視界や声は曖昧で、どこか靄がかかった。意識が体の外にある感覚。寝てるのか起きてるのか、それさえ中途半端な状態。

その頭の上に、何かが載った。

暖かくてやわらかくて、そして懐かしい。

視界はゆっくりと暗転する。

変わりに浮かび上がるはさっきと同じ、夕焼けに染まった草原。けど、そこにいたのは幼い男の子と女の子で、土手の上に座り斜面

に沿って足を伸ばしていた。男の子はローマ字がでたらめに並んだシャツに短パン、女の子は白いノースリーブに薄い上着を羽織っていた。よく見れば、二人の服はが少し破れていて所々に土や草が付いていた。

二人は隣り合って、何が面白いのか笑顔で遠くを見つめていた。俺はその二人の隣に立って、二人が見てるものがなんなのか視線を並べた。

……なにも見えるわけねえか……
すぐに諦める。

あの頃の俺はいつも何かを追いかけていた。ちっこい体を目いっぱい広げて、届かないものに必死で手を伸ばした。目にはいつも希望や期待しか映らなかった。届かないところにあるモノの、その先に何があるのか楽しみで仕方がなかった。

そのうち体も頭も成長して、それまで届かなかったものが簡単に手に入って。その先はいつも空っぽで。……こんなもんかと失望した。

いつしか俺は、手を伸ばさなくなった。追いかける足が鈍った。期待することを——止めた。

一度手に入れてしまえば、その輝きが消えてしまう気がして怖かったから……

だから俺は——

そこで夢は途切れた。いや、現実……か？ ……わっかんねえ。俺を起こしたのは終了のチャイムで、頭の上にあった感触も消えていた。

あれも、夢だったんだろうか……？

ないものに首をかしげ、感触があった部分を書きながら頭を持ち上げる。ニヤニヤとした顔がまってるなんて漠然と思ってたら、ほんとに気持ち悪い笑みが五つ俺を覗き込んでいた。

言葉はなく目を細めて睨んでみたが、五人はこっちの弱みを握っ

たかのように笑い続け何も答えなかった。俺は気持ち悪いと眉間にしわ寄せて視線をそらした。

けど、無意識のうちに探していた姿はいなかった。

「幸せものですなあ」

真夏の水道のような生暖かさに、胸焼けしそうだったから。とりあえず一発殴っておいた。

寝ては怒られ。うつ伏せっては問題を当てられ。言い訳を加えたら、黙って本文を読めと一蹴された。

今日はやけにエンカウント率たけえなと不貞腐れて。一日の授業が終わった。

掃除当番ではないはずと、言い張ってみたが、小言一つに頭部の痛み一つとともに廊下の箒がけをした。分かっていたことなのに、なんか納得いかない。笑い時のない会話しながら帰っていく生徒たちの笑顔を、何度のろってやろうと考えたことか。

あらかた下校が終わって、部活の声が本格的になっても、まだ太陽の日は衰えを知らなかった。これじゃあ、日暮れはいつになるのか……。窓に背をつけて青春する姿を見るのに区切りをつけて、俺は掃除用具を片付けて鞆を持った。見つからないものは見つからない。

何となくいるような気がしたが、下駄箱の向こうにその姿を見つけて、俺は露骨に安堵した。冷たい下駄箱に背中を預け、季節外れの雪でもなっているかのように空を見つめていた。

「そうやってると、少しは大人びて見えるんだな」

恥ずかしさを誤魔化して、そんな嫌味に返る。

振り返った琴未は、待ち人来ると華やいだ。

「やっときたっ。もう、待ちくたびれたよ……。掃除、サボるのもほどほどにね」

頬を膨らまして怒る琴未は、やっぱりガキっぽい。小学生の頃から一切変わらない。

「おう」

だから俺は靴を履きなおすフリをして、顔を下に向けた。隣で何かと話を振られても、俺は前を見て生返事だった。

琴末とは小、中と同じ学校。高校はそれぞれ別々の私立を受けたっていうのに、俺はそっちを落ちてこいつは合格を蹴った。その理由は敢えて聞かないようにしてきた。聞いてしまったら、今までの俺の懊悩を全部否定してしまう予感があったから。

いつも隣にいて、腐れ縁なんて生易しいものではなくって。子供の頃の楽しい戯れが、今も続いているかのように振舞っている。

成長期が他のやつらより早く来て、元から堀の深かった俺がどんな年上に見られるようになって、手の届くものが増えたせいで期待や希望を忘れてしまっても。琴末はいつも子供みたいな無邪気な笑みを浮かべる。

それがまぶしくて、手に入れたくて、けど手に入れた後の虚無感が怖くて。

今もすぐそばににいるというのに、俺はあと少しが踏み出せなかった。

もし、琴末に感じる光が失ったら。成長とともに失っていった光のように、手に入れた瞬間輝きを感じられなくなったら。そんな子供じみた臆病風が俺を縛っていた。

琴末は、隣を歩く琴末は、四季にうつろう花のようにいろんな顔をする。

子供っぽく微笑んで、泣きそうな顔で怒って、呆れたように不貞腐れて。時々、こっちがドキッとするような影に覆われたような表情をする。

昔と変わらず、けどいつの間にか俺なんかを追い越して。

それに引き換え、俺は手を伸ばしては途中で諦めて、追いかけるうとしても途中で足が鈍る。そして元の位置に戻る。

退屈で、平凡。それがいやだといいながら、俺は同じ日々をただ繰り返すだけ。

「あ、懐かしいね洋介<・・>」

悔しさや情けなさに苛まれた顔を上げると、そこは確かに良く知った場所だった。

住宅街の横を流れる川、それに沿った河川敷だ。

俺らが通っていた小学校も、中学校もここにかかる橋の向こうにあって、いつもここで道草をしていた。

草がぼうぼうのときは宝探しだと駆け回り、雨の日は橋の下で雨宿りした。雨が上がった日は服が汚れるのも気にせず泥につこんだ。天気の日には二人で寝転がって、散歩中の犬に食べられそうになったこともあった。

思い出はいくらでもあるはずなのに、浮かんでくるのは一つだけ。

「懐かしいなあ……。あの頃はほんと無鉄砲で、今考えると恥ずかしいなあ」

琴末は昔のことを思い出して耳まで真っ赤にしていた。

「ねえ、洋介」

けど、それもすぐに真剣な声に変わる。決意を込めて振り返った顔は、緊張のあまり固まっていた。

俺も息を呑んだ。琴末は普段見せる子供っぽい仕草や表情も忘れ、喉の奥を縛りつけられたかのように俺を見上げていた。俺だけを見つめていた。追い詰められ、我も忘れることもできず、胸を詰める思いが抑えきれなくなった。

「わ、たし……は、ずっと……ずっと、追いかけて……。わ、わたしっは、洋介のこと……」

琴末も同じなのだ。

俺は聞かなかった。どうして俺と同じ高校を選んだのか。だってそんなこと、俺には痛いほどわかったから。立場が逆なら、俺だってその道を選んだはずだったから。

あの時、俺も琴末も私立に受ければ、……俺たちは自分の感情に嘘お突きつけたまま、手に入れる恐怖を忘れる道を選ぶはずだったのだ。そうやって、自分の気持ちに逃げ道を作った。諦める言い訳

を取り繕った。

初めての感情に触れた人形が、あるれだす気持ちに戸惑いながら、経験がなく体面にはうまく現すことができないように。琴末もまた無理して自分を形作っていた。

だったら、——もう隠すことは、……できないか。勇気はまだ足りないけれど。

「——！」

こわばる体を引き寄せて、額額をくつつけた。

互いの温度を確かめ合って、そこから伝わる温度を鼓動を、間近の呼吸をかみ締めて。

「好きだ。琴末。ずっと、……ずっと」

それ以上言葉が出なかった。胸の奥で燃え上がる感情を、今まで押し付けてきたものの開放感を、あらわす言葉が見つからなかった。デジャビュには風景が足りないけれど。俺はその手を、やわらかくて指の細い手を取ったのだ。

(後書き)

初めての投稿です。
気付いていたいただいた方、最後まで付き合っていただけの方
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5810n/>

現想

2010年10月21日11時40分発行